

日本語での発話理解：第二言語話者と母語話者

萩原明子*

はじめに

外国語を身に付けようと思っている多くの学習者にとってその言語で会話が出来るようになることは重要な目的の一つである。日常会話だけでも出来るようになりたいと思っている学習者も多いのではないだろうか。多くの人にとって日常会話というものは、まず初めに習得し、より高度なレベルの言語活動が可能になるための第一歩のようなものであっても不思議ではない。しかし、実際の言葉がどのように使われているかを観察してみると、いわゆる日常会話というものが、学習者が期待するほど簡単で習得しやすいものだととても考えにくい。日常的に使用される言語には多くの慣用的な表現や省略、コンテキストによって意味が変わるあいまいな表現、更には、その言語特有に現れる待遇表現、特に、人間関係を反映したポライトネスにかかわる表現が含まれているからである。日常会話ができるようになるということは、日常的に起こりうる様々な状況の中で、相手の言っている事を正確に理解し、相手に自分の伝えたいことを過不足なく表現できるようになるということであり、意識的であれ無意識であれ、これら複雑に絡み合った様々な要因を考えることなしに会話を成り立たせることは困難である。

学習者にとっては、自分の意図を正確に伝えることはもとより、学習中の外国語で話し手の意図を理解すること自体容易なことではない。それを母語話者と同様に理解できるようになるためには、その言語の文法や語彙などの運用能力だけでは不十分であり、それ以外の言語学的な知識やスキル、とりわけ語用論的な知識や世界知識 (i.e. knowledge of the world) と一般的に呼ばれる言語外の知識も必要だと考えられる。

もちろん、実際のコミュニケーションにおいては、話者同士が協調しながら会話を進めていくことから、第二言語話者がその場にいた場合、母語話者同士の会話とは違った特徴を持つということが考えられる。このような場合、必ずしも母語話者と同様の発想をすることは期待されていないかもしれない。しかし、そのようなことを考慮に入れたとしても、やはり、コミュニケーションを円滑に行うためには、話者の意図をより正確に理解する能力の重要性は否定できない。

会話における発話者の意図を受け手がどのように理解するかのプロセスを説明する理論として Grice の会話の論理 (1975) がよく知られているが、今回、Grice の理論と Searle (1975) の間接的発話行為の理論を応用し、外国語としての日本語 (JSL) 学習者が日本語での発話の意図を類推できるか調査した。

Grice の会話の論理

日常の会話において話者は伝えたいすべての情報を言語化するわけではなく、容易に類推可能なものやお互いに既知であるとみなされる情報は言葉にせず、その時点において必要性の高い情報についてのみ言葉にすると考えられる。「おい」のひと言だけで、お茶が出てきたり、新聞が出てきたりするの、聞き手がその意図を正確に理解できるという前提があつてのことで、自宅のリビング以外の場所で家族以外の人にお茶を入れてもらいたい時に「おい」と言ってもその意図が伝わると期待するには無理がある。逆に、いつも家族のものに「おい」といってお茶をいれてもらっている人が、「お茶を飲みたいと思っているのですが、お茶を入れてください」と言ったとしたら、家族のものはいい

* 生命科学部 EFL 研究室

たいどうしたのだろうと首をかしげるに違いない。

Grice (1975) はこのような日常に交わされる一見不十分な言葉によって人々がその言葉の文字通りの意味以上の情報(含意)をやり取りしていることに注目し、協調の原理 (Cooperative Principle) とそれにかかわる4つの格率 (maxims) : 量の格率 (maxim of quantity), 質の格率 (maxim of quality), 関連の格率 (maxim of relation), 容態の格率 (maxim of manner), の概念をもって会話の含意を説明した。この考え方では対話者はお互いに相手が協力的であると思っているという前提で、4つの格率を遵守するか、敢えて無視するか、知らずに無視するか、格率相互間の干渉によって遵守できないか、などの状況で含意が生じるとしている。Griceの理論はこのように聞き手が4つの格率を利用し計算すること (calculability) によって含意を得るという考え方であり、自然な会話の中で慣習化されていないもののみを説明する (non-conventionality) と明言している。

間接的発話行為の慣用化

Griceが非慣用的な含意を説明したのに対して、Searle (1975) は、間接的な発話行為 (indirect speech acts) のうち慣用化されたものをGriceの理論と関係づけて説明している。たとえば、慣用的によく使われる表現に “Can you pass me the salt?” があるが、この文法的な意味は聞き手が塩をとる能力があるかどうかを聞いているのであるが、実際には聞き手に塩をとってくれるように依頼していると理解すべきコンテキストで使われることが多い。Searleは「能力があるかの問い」を「依頼」と解釈するプロセスの一部にGriceの会話の論理が必要であると説明しているが、Searleの目的は「依頼」の発話行為が具体的にどのように表現されるかをこの例を使いながら説明しているのであって、実際に表現されたものを聞き手がどうやって理解するかを分析している訳ではない。しかし、Searleの提示した慣用化された発話内行為 (conventional illocutionary acts) は、Grice理論で説明される会話に置ける論理を応用する上で重要な要素になりうる。

Griceは会話の論理を応用する上で、対話者は使用された言葉の慣習的な意味(言語的意味)をもとに含意を類推すると言っているが、この場合、慣習的な意味というのが意味論文法論的に与えられる意味なのか、語用論的に慣用化された意味であるのかの明確な定義はない。このような場合、聞き手が文法的な意味を理解し、それをもとに語用論の意味を類推するというプロセスをとると考えるよりは、むしろ「能力があることを尋ねる」ということが「依頼」であるという関係が既に慣用化されていると考えたほうが、直感的には分かり易い。慣用的な間接的発話行為は、もともとGriceの理論で説明できるような字義通りの意味をもとにその意図を類推する表現であったものが、歴史的なプロセスを経て、字義通りの意味を経由することなくその語用論の意味に直接到達できるようなものになったと考えられる。

これらの理論的な説明に関して実験的に言語を研究する言語心理学においては、慣用的間接発話行為 (conventional indirect speech acts) を説明するモデルがいくつか提案されている。これらのモデルは話し手の意図(含意)を理解するために、文字通りの意味 (literal meaning) を使用するかどうか1つのポイントになる。代表的な研究としてClark and Lucy (1975) の literal-meaning-first model があるが、このモデルでは間接的発話行為を理解するときには必ず字義通りの意味が処理されると考えている。これに対して、Gibbs (1982) は conventional-meaning model を提案し、慣用的間接発話行為においては文字通りの意味へのアクセスは必須ではないと主張した。つまり、たとえば一部のイディオムを理解する時に、そのイディオムの文字通りの意味が全く処理されずにイディオムとして意味のみが理解されると言う研究 (Forrester, 1995) と同様のプロセスが慣用的間接発話行為でも行われているということである。

言語哲学、言語心理学の研究結果を総合すると、聞き手が発話の含意を理解するためには、少なくとも、その発話

の字義通り（文法上）の意味、それを文脈に照らし合わせて類推する能力、慣用的に使われる表現の慣用的な意味、などの知識が必要であるといえる。大人の母語話者の場合、特に意識することもなく、多くの場合含意が理解されると考えられるが、第二言語学習者の場合、特に外国語として学習している場合、自然な形で間接的な表現のインプットが十分に得られない状況が予想され、必ずしも同様な形で情報がプロセスされていない事が考えられる。外国語としての日本語学習者が日本語での発話を母語話者と同様に解釈しているか、これらのファクターをもとに調べることにした。

研究の目的

言語哲学や言語心理学の観点からみると、外国語学習者にとって間接的な発話を理解するのは単に文法上の意味を理解する以上に難しいと考えられる。本研究では外国語としての日本語学習者を対象に、日本語での間接的な発話の理解が母語話者と学習者によって違うかどうかを以下の3つの違ったタイプの発話をもとに調査した。

- (1) 字義通りの解釈で意味が通る発話 (Literal Utterances)
- (2) 慣用的な間接的な発話 (Conventional Utterances)
- (3) 慣用的ではない間接的な発話 (Inferential Utterances)

外国語学習者が(1)の発話を理解するためには、文法と語彙の知識が必要であり、(2)の発話を理解するには、文法と語彙の知識だけではなく慣用表現そのものを知っている必要がある。(3)の発話を理解するには、文法、語彙を理解した上で、コンテキストに照らし合わせながら会話の論理を応用しなければならない。これらの3種類の発話の解釈が母語話者と比較して差が出るかを分析し、学習者が母語話者と同じように理解できるタイプの発話とそうでないものを調べた。仮説としては学習者にとって最も理解しやすいのは(1)であり、(2)と(3)に関しては、会話の論理の応用ができるか、というファクターと、慣用表現に関する十分な知識があるか、というファクターが関連しているため、解釈が母語話者と違う可能性がある。会話の論理には普遍性があり、言語的な慣習 (convention) には、文化による違いが出るはずであるとすれば、(2)のほうにより大きな解釈の違いが出ると考えられる。

研究の方法と予備調査

方法は英語で Grice の含意の研究をした Bouton (1989) の多項選択方式にならない、発話とそのコンテキストを読み、その発話の解釈を4つの選択肢の中から選ぶタスクを採用した。1つのコンテキストに対して3種類の発話とそれらに対する複数の解釈を用意するため、予備調査を行える限り実証的にデータを収集することを試みた。予備調査は全部で5回行い、予備調査(1)では、日本語での自然な会話を観察し、間接的な発話をコンテキストの情報とともに記録した。その中から多肢選択問題として適当だと考えられる12の発話を選択した。予備調査(2)では日本語母語話者を対象に自由回答式質問法を使用し、(1)で選択した12の発話をそれぞれ与えられたコンテキストの文章を参考に解釈してもらい、母語話者の一般的な解釈を調査した。さらに予備調査(3)では、日本語学習者に同様の調査を行い、本調査で不正解として使用する多様な選択肢を収集した。予備調査(4)においては、母語話者の選んだ最も標準的な発話の解釈を利用し、別のグループの母語話者に自由回答式で元の発話と同じような解釈が可能な別の発話の表現を書いてもらった。これらのデータをもとに最終的に12のコンテキストに対し3種類の発話 (Literal, Conventional, Inferential) とそれらに対する4種類の違った解釈を得ることができた。3種類の発話は Literal なものはより直接的な表現で、残りの二つはより間接的な表現であるはずであるが、それを検証するため予備調査(5)をおこなった。この調査では、日本語母語話者30人に12のコンテキストにおいて3つの発話がそれぞれのぐらいい間接的であるか1から9の尺度に置き換えてマークしてもらい、結果を統計的に分析した(繰り返しの

ある二元配置の分散分析) ところ, 発話タイプには有意の差があるという結果になった「 $F(2)=67.155, P<.0001$ 」. 平均値から判断すると, Literal Utterances が一番ストレートな表現で, Inferential Utterances が一番間接的な発話となった.

予備調査で得られたデータを使用し本調査用の質問表を作成した. 質問表は全部で3種類作成した. それぞれの質問表には12問の多肢選択問題があり, それぞれの問題はコンテキスト情報を表した文章, Literal Utterances, Conventional Utterances, Inferential Utterances のうちの1つの発話, さらにその下に4つの違った解釈を選択肢として記し, 回答者はコンテキストの文章と発話を読み, その発話に対する最も適当な解釈を1つ選んで回答とした. 発話の種類によりタスクの難易度に差が出る可能性があることから, 乱塊法を使用し3種類の発話がそれぞれの質問表に同じ比率で含まれるようにした.

被験者とデータ収集法

日本語母語話者 (L1) 60人と日本語学習者 (L2) の2グループ60人, が調査に参加した. 日本語学習者の母語による影響を最小限にするため日本語学習者は全員アメリカの大学で中級日本語クラス (日本語の学習歴が満2年を超えるレベル) に在籍し, かつ日本に6ヶ月以上滞在したことのないアメリカ英語母語話者とした. 日本語母語話者は日本語学習者と同じ年代の海外在住の経験のない日本人大学生を選んだ. 中級日本語学クラスに在籍するアメリカ人学生数が非常に限られているため複数の大学, 具体的には, ワシントン大学, ミシガン州立大学, ハワイ大学に協力を依頼し, データを収集した.

L1話者グループとL2話者グループをそれぞれ3つのグループに分け, それぞれのグループに3種類の調査票のうちの1種類を割り当て, 回答してもらった.

結果

調査票の分析方法は予備調査で使用した解釈を「正しい」解釈とし, 一般的な多肢選択のテストと同様の方法で正答率を計算し分析した. 乱塊法を使用したため, まず初めにグループ毎に集計し, それから, 発話タイプ毎に集計したのち, 二元配置の分散分析によって統計的に分析した.

表1は調査表の回答の中で「正しい」解釈を正答とした正答率を基本にした記述統計である. 日本語母語話者グループの方がどのバージョンの調査票でも正答率が高かった.

表 1. グループ毎の正答率

Group(調査表)	被験者	平均値 (n=12)	SD	正答率 %
L1 (v1)	20	8.60	1.429	71.67%
L1 (v2)	20	9.30	1.301	77.50%
L1 (v3)	20	8.55	0.998	71.25%
L2 (v1)	20	6.65	1.663	55.41%
L2 (v2)	20	7.00	2.513	58.33%
L2 (v3)	20	7.00	2.406	58.33%

表1の結果を発話タイプ毎に集計し直し、それぞれの正答率を出したものが表2である。母語話者グループ間の方が発話タイプ毎の正答率に顕著な差が見られたのに対して、学習者グループでは全体的に正答率が低かった。この結果を繰り返しのある二元配置の分散分析で分析したところ、表3が得られた。L1, L2間には有意の差「 $F(1, 118)=34.714, P<.0001$ 」があったが、発話タイプ間には有意差は認められなかった「 $F(2, 236)=1.241, P=.291$ 」。発話タイプと被験者グループ間の交互作用を見たところ有意差があった「 $F(2, 1)=5.376, P=.0052$ 」。

表 2. 発話タイプ毎の正答率

発話のタイプ	被験者	平均値 (n=4)	SD	正答率%
L1 (Conventional)	60	3.250	.628	81.25%
L1 (Inferential)	60	2.900	.858	72.50%
L1 (Literal)	60	2.667	.951	66.67%
L2 (Conventional)	60	2.167	1.122	54.17%
L2 (Inferential)	60	2.350	1.039	58.75%
L2 (Literal)	60	2.367	1.164	59.17%

表 3. 繰り返しのある二元配置の分散分析の結果

	DF	SS	MS	F-value	P-value
Group	1	37.378	37.378	34.714	<.0001
Participants	118	127.056	1.077		
Utterance types	2	2.217	1.108	1.241	.2911(NS)
U Types * groups	2	9.606	4.803	5.376	.0052
Types * Participants	236	210.844	.893		

グラフ1は表3の結果を図にしたものである。これによると3種類ある発話タイプのなかでも Conventional Utterances (慣用的な間接発話) タイプの解釈において L1 話者と L2 学習者に大きな差が見られた。これを多重比較 (Toothaker, 1991) したところ、表4の結果が得られた。Literal Utterances と Inferential Utterances においては統計的な差はみられなかったが Conventional Utterances においては有意の差があった。

グラフ 1. 発話タイプと被験者グループの発話タイプ毎の交互作用図

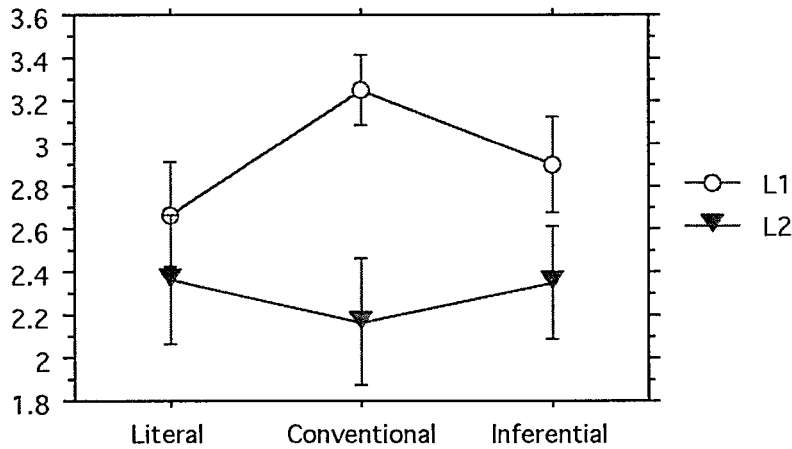


表 4. Toothaker (1991) による多重比較の結果

Utterance type	DF	Mean Difference	t-value
Literal Utterances	118	.300	1.682
Conventional Utterances	118	1.083	6.071*
Inferential Utterances	118	.550	3.083

* p < .05

さらに、発話タイプが被験者の正答率に作用しているかを繰り返しのある一元配置の分散分析を使用して分析したところ、日本語母語話者のグループ（表 5）では有意差が見られたものの、学習者（表 6）において有意差はなかった。

表 5. 繰り返しのある一元配置分散分析結果（日本語母語話者）

	DF	SS	MS	F-value	P-value
Utterance types	2	10.344	5.172	6.963	.0014

表 6. 繰り返しのある一元配置分散分析結果（日本語学習者）

	DF	SS	MS	F-value	P-value
Utterance types	2	1.478	.739	.708	.4948

これらの結果から日本語母語話者については、3種類の発話のうち慣用的な間接発話（Conventional Utterances）に関しては、予備調査では文字通りに解釈できる発話（Literal Utterances）よりも間接的であると判断されていたにもかかわらず、ほかの2つの発話タイプに比べて、意図がスムーズに伝達されがちであるということがわかった。慣用的でない間接的な発話の正答率が低いのは、予備調査でも最も間接的と評価され解釈においても慣用的な表現に比べ解釈が一定でないという事から、それが反映されていると考えられる。しかし、もっともストレートな表現と解釈されていた字義通りの発話（Literal Utterances）に関しては、予想に反して、期待された解釈を必ずしも選んでいなかったという結果になった。一方、日本語学習者（L2）に関しては、慣用的な間接発話（Conventional Utterances）に関しては若干正答率が低かったものの、3つの発話タイプに有意な差が表れなかった。2つのグループ、（L1）（L2）、を比較すると、正答率では、慣用的な間接発話に関しては顕著な違いが現れたが、ほかの2つのタイプ、とくに、文字通りの解釈で充分意味が伝わるはずの発話（Literal Utterances）の解釈において差が少なく、正答率を比較すると、日本語母語グループ（L1）では一番低く、日本語学習者グループ（L2）では最も高かった。

考察

調査の結果、日本語学習者と日本語母語話者の間に間接的な会話の解釈において顕著な違いがあることがわかった。予想通り、日本語学習者は一番率直な言い方、Literal Utterances（字義通りの解釈が可能な発話のタイプ）、に関して、素直にその解釈を選ぶ傾向にあったが、日本語母語話者は、素直な解釈が可能であるにもかかわらず敢えて違った解釈を選ぶことがあり、その結果「正答率」、期待された解釈を選ぶ率、が低めになる結果になった。これは、4択のテスト方式で選ばせるタスクの特徴が出たようで、日本語母語話者にとってあまりに単純な解釈は、タスクの性質上選ばれなかった可能性がある。実際のコミュニケーションにおいては、恐らく複数の意味がプロセスされるものの、会話の進行につれて複数の意味から最もふさわしい意味が選ばれていくことが考えられる。もしも、そうであれば、日本語母語話者にとっては、Literal Utterancesは、その率直さゆえに類推の必要性を感じさせ多義性のある（polysemous）表現として認識されていたと考えられる。

一方、慣用的なフレーズを使用した発話（Conventional Utterances）においては反対の結果になった。会話の論理のような類推を必要とするもの（Inferential Utterances）に関しては学習者の正答率が比較的高かったことから、日本語母語話者との差は慣用的なフレーズのものに対するものが一番大きく、これが、日本語母語話者と日本語学習者の違いを一番端的に表すものとなった。今回の調査では慣用句を使用したが発話、使用した慣用句は日本語の初級で扱うものかそのバリエーションのみに限定し（たとえば、「ごちそうさま」「何もございませんが」などの慣用句）、予備調査をして同レベルの日本語学習者にとって使い慣れたものを使用した。そのため、本調査の学習者もそれらの表現は既に学習済みであったと考えられる。慣用句は本質的に文字通りの意味と慣用的な意味の両義性を持ったものであるが、一般の会話で使われる頻度の高い基本的な慣用句であればあるほど、さらに多くの慣用的意味が加わっていくと考えられる。学習者にとっても使い慣れた「ごちそうさま」のような表現でも、単に食事の終了を表す表現、食事をご馳走してくれた人に対するお礼、新婚の夫婦ののろけ話に対する返答、など、慣用的に様々な意味がある。会話の聞き手はコンテキストに照らし合わせて一番適当な意味を探さなくてはならないのだが、日本語学習者が日本語母語話者の選んだ解釈を選ばず、ほかの解釈を選んだ場合が多いとしたら、単に慣用句の意味の選択に失敗したか、もともと、日本人母語話者のように多くの解釈の可能性を知らなかったのが原因とも考えられる。

この調査では解釈の選択の理由を問う事が出来なかったが、実際の会話の流れを分析する会話分析などの手法を使用すれば、それらの発話がどのように解釈されたか間接的であっても知ることが出来る。実際どんな意味が頭の中でプロセスされたかを調べることは、多くの言語処理が自動化され無意識のうちにプロセスされていることを考えると、

大変に困難な事である。

慣用的な表現に関しては多くの日本語母語話者が複数の意味の中から文脈にあった一定の解釈を選んでいたのでから、文脈から特定の解釈を導き出すタスクとしては特に困難なものが今回の調査に使われてはいなかったと考えられる。それにも関わらず、学習者と母語話者で一番解釈に差が現れたタイプの発話が、Griceの会話の論理のような類推のプロセスが必須の表現ではなく、むしろ、これら決まり文句を使った表現であるというのは、Griceの理論がより普遍的な認知プロセスを説明するかどうか考える上で興味深い。

まとめ

今回日本語母語話者とアメリカ英語母語話者で日本語を学習している大学生を対象に、口語表現の発話単位での解釈という観点で調査してみたが、Griceの会話の論理を使用して意味を類推するタイプの発話に関しては母語話者と学習者の間に統計的な差は見られなかった。これは、いずれのグループでも類推するプロセスが必要であり、自由な類推の結果4択の解釈に必ずしも納得できなかったのが一つの原因であると考えられる。この場合、母語話者と学習者の会話の論理の応用にそれほどの違いはなかったから、統計的な差に結びつかなかったのかも知れない。一方、言語に独特の慣用表現に関しては学習者はたとえよく知っていると思っている表現でも十分な語用論上の知識まで合わせ持っているとは限らないということが考えられる。学習者がliteralな表現に関して比較的正答率が高く、母語話者の場合低かったのは、率直に言うという行為の特性を示している。コンテキストから適当な解釈を選ぶというのは、3つすべてのタイプの発話に共通のもので、いずれのタイプを聞いても、文字通り解釈するのか、決まり文句的に解釈するのか、ロジックを使って解釈をするのか、などの状況では同じだが、実際には学習者はコンテキストが字義通りの意味を支持することが出来ればすぐそのまま解釈し、母語話者は更に類推を重ねがちであるのがわかった。

教授法に関しては、外国語の授業に十分に語用論の要素を持ち込み、決まり文句や、皮肉、嫌み、冗談など、間接的な表現を利用した発話が理解できるようになるための工夫を凝らす必要がある。特に慣用的な表現に関しては、文脈に応じて複数の解釈が可能なものがあり、それらもあわせて教える必要がある。

引用文献

- Bouton, L. F. (1989). So they got the message, but how did they get it? *IDEAL*, 4, 119-148.
- Clark, H. H., & Lucy, P. (1975). Understanding what is meant from what is said: A study in conversationally conveyed requests. *Journal of verbal learning and verbal behavior*, 14, 56-72.
- Forrester, M. A. (1995). Tropic implicature and context in the comprehension of idiomatic phrases. *Journal of psycholinguistic research* 24(1): 1-22.
- Gibbs, R. W. (1982). A critical examination of the contribution of literal meaning to understanding nonliteral discourse. *Text*, 2, 9-27.
- Grice, P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech acts* (pp. 41-59). New York: Academic Press.
- Searle, J. (1975, 1991). Indirect speech acts. In S. Davis (Ed.), *Pragmatics: a reader* (pp. 265-277). New York: Oxford University Press.
- Toothaker, L. E. (1991). *Multiple comparisons for researchers*. Newbury Park, CA: Sage Publications, Inc.